

「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」に関する小解説

2024年3月31日 復活日

コールコミッティー同

2024年2月1-2日、宣教協議会実行委員会とコールコミッティーは共同で、「2023年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」について、各項目の説明会を開催しました。その際の質疑応答で、「その説明を文章化したものもあってはよいのではないか」というご意見がありました。これを受け、コールコミッティーは「呼びかけ」の各項目について少しく説明を記すことといたしました。もちろん、ここに記されているのは絶対の基準というものではありません。本解説は「呼びかけ」について考察する際の一つの材料となることを願って表されたものという位置づけになります。

ここからまた歩きはじめよう ～いのちに仕え、となりびととなるために～

「ここからまた歩きはじめよう」は、2012年宣教協議会以降、全体的に見れば明らかに教勢を落としている日本聖公会が11年ぶりの協議会を経て、再び歩み出すことが呼びかけられています。「いのちに仕え、となりびととなるために」の「いのちに仕え」は前協議会を踏襲したもので、この世界の一つ一つのいのちに向かい合い仕えることを志すものです。「となりびととなるために」は、「困っている人たちのとなりびとになってやろう」という高慢な意味ではなく、いのちに仕える中で与えられた出会いに自らもまた応答することを指すものです。

1. 神のみ声に耳を傾けよう<祈り・み言葉・礼拝>

神の宣教（ミッシオ・デイ）を重視する聖公会の立場において、神のみ声に耳を傾けることは原則と言ってよいでしょう。その際に重視されるのは「祈り」であり「み言葉」であり、それが集約する「礼拝」であると言えます。この項目には以下の三つの提案が示されています：

- ・イエスの弟子となる…わたしに与えられた賜物はなに？
- ・進むべき道を問い続ける…聖書を読み、神のみ心を祈り求めよう
- ・変化を恐れない…宣教協働区、新しい祈祷書、生き生きとした「今」の礼拝！

1.1. イエスの弟子となる…わたしに与えられた賜物はなに？

イエスを救い主と信じて洗礼を受けた私たちは、一人一人、イエスの弟子として歩んでいます。世界の聖公会においても「弟子であること」(Discipleship)は重要な鍵語として認識されています。それぞれの「わたし」に与えられた賜物は様々であり、その賜物は「活かさなければいけないもの」というのではなく、既に神から、主イエス・キリストから、先行して与えられているものです。そのみ恵みを日常の中で、また、礼拝の中で感じられるようにすることは、より心豊かな生活につながります。なおこの賜物は、何かを完全に達成しなければ活かしたことになる、という類のものでもありません。たとえば、身動きの取れない状態にあっても、教会や地域の人たちを想って一生懸命に祈ることなどもまた、賜物の証しであると言えます。

1.2. 進むべき道を問い続ける…聖書を読み、神のみ心を祈り求めよう

キリストを信じるわたしたちにとって、進むべき道の指針となるのは当然ながら聖書です。

その聖書を通して神のみ心を祈り求めようということは大切でありましょう。聖書は日課として礼拝で読まれています、主日礼拝以外で聖書を読む機会がある聖公会信徒は多くない、とはよく言われるところです。礼拝で読まれているにしても、研究会に出席していたとしても、聖書全体どころかいくつかの文書だけでも通読したことがある、ということもあまり聞かれませんが。

聖書のみ言葉の一節一句からでも様々な学びが得られるのはたしかです。しかし、様々な物語や教訓、詩歌や祈禱を備えた各文書は、その前後関係も含めて通読することでさらにその豊かさを増します。創世記からヨハネの黙示録までの聖書全体を味わうことで、一人一人が様々な想いを得られることが期待されます。

1.3. 変化を恐れない…宣教協働区、新しい祈禱書、生き生きとした「今」の礼拝！

変化を受け入れるのは難しく、苦しいこともあるかもしれません。ただ、世の中は移り変わりゆくものであり、現代では価値観の多種多様さもますます明らかになっています。日本聖公会の枠組みの中でも、宣教協働区という新たな動きがあり、わたしたちが用いる祈禱書にも改訂が予定されており、その文言や用いる言葉、日課などに変化が生じることは事実となっているところです。礼拝もコロナ禍によって必然的に変化せざるを得なかった部分もありますし、これからの宣教のために変えていかなければならない部分もあるでしょう。故きを温ねて新しきを知り、礼拝の形を学び探究してゆくときを迎えています。

そもそも、恐れる・恐れないにかかわらず、変化は生じてしまうものです。重要なのは、生じてゆく変化を教会共同体の一人一人が分かち合い支え合い、安心してその変化を迎える、また、変化してゆく中でも守るべきことは守ってゆく、ということでありましょう。聖公会神学の核心の一つである「中道（ヴィア・メディア）」の伝統も、常に変化してゆく時代状況や価値観にあって、主に信頼して自分たちが歩む道筋を探求するためのものであり続けてきました。

2. 人々の声に耳を傾けよう<教会・地域・となりびと>

「神を愛し、隣人を愛する」(マルコ 12:28-34) ことこそ最大の戒めであるとイエスに教えられているわたしたちの次なる焦点は「人々」に向けられます。そのため、呼びかけの第二の項目には人々の声に耳を傾けるということが挙げられています。この世界で、聖霊のまじわりによって形成される教会共同体、その教会共同体が仕える地域、そしてとなりびとが、この項目で考えられることとなります。この項目では以下の三つが示されています：

- ・セーフチャーチにしよう…開かれた教会、すべての人が安心できる居場所に
- ・小さな声を大切にしよう…多彩性を輝かせ、ともに生きる
- ・地域の必要に応える…関連施設とも協働し、課題に取り組もう

2.1. セーフチャーチにしよう…開かれた教会、すべての人が安心できる居場所に

セーフチャーチの概念は、日本聖公会を含むすべての聖公会における重要な課題と考えられ、話し合われています。日本以上にきわめて明確で具体的な人権侵害が蔓延している国々もあり、この言葉の意味合いは各国において、ずれが生じうるものです。ただ、セーフチャーチの意味が、開かれた教会、すべての人が安心できる安全な居場所であると定義されるとき、日本においてもその精神は重要なものと理解されることでしょう。英語やそれを音写したカタカナ語表記は、日々政治や社会に関する報道で濫用されていることもあって辟易する、

というかたもおられるかもしれません。しかしながら、世界の聖公会で大切に分かち合われており、何より、色々な意味で「セーフ」である教会は、元々教会が目指していることであるため、この用語は日本聖公会でもそのまま用いられることになっています。

本当にあらゆる人にとって「セーフ」であるのか、本当に困っている人がたどり着ける教会であるのか、この問いについて皆で分かち合いながら考え、その実現を祈ることは日本聖公会においても間違いなく重要と言えます。目下、ガイドラインも策定中です。

2.2. 小さな声を大切にしよう…多彩性を輝かせ、ともに生きる

セーフチャーチの考えと同様に、小さな声に耳を傾けること、多彩な個性の色を持った人たちがありのままに輝ける場になるよう努めることは、教会が本来的に有するはたらきの特性と言えます。

そもそもわたしたち一人一人、まったく同じということはありません。どこかの誰かが多彩なのではなく、わたしたち皆が多彩なのです。その「多彩性 (Colorful Diversity)」を認め合い、ともに歩み、共同体に属する者たちが輝ける場を目指すことは今後ますます求められましょう。

2.3. 地域の必要に応える…関連施設とも協働し、課題に取り組もう

教会は、建物そのものがただちに主体になるのではなく、神、イエス・キリスト、聖霊から呼ばれた人々の織り成す共同体がまず重要な主体となります。

その共同体には、この世界において必ず、集う地域というものがあります。その地域には、何らかの固有の課題があることでしょう。それは「教会外の浮世事」ではありません。教会共同体もまぎれもなくその地域に在るのであり、教会共同体にとって自分事であるはずです。仮に教会ひとつではその課題に取り組むことが困難であっても、聖公会内外の様々な関連施設があります。力を合わせることで、人々が、また、自分が、豊かなみ恵みの中にあるのをあらためて確認できることが期待されます。

3. 世界の声に耳を傾けよう <神が創られた自然・世界・社会>

- ・地球のいのちに仕える…教会ができる SDGs は？
- ・平和をつくりだそう…いのちを脅かすすべての暴力に「NO」！
- ・世界のうめきや叫びに向き合おう…世界の聖公会(アングリカンコミュニオン) とつながりながら

3.1. 地球のいのちに仕える…教会ができる SDGs は？

「地球のいのち」にはむろん人間も含めた被造物全体、この自然すべてがかかわります。SDGs の理念は国連を通して発出されましたが、国内外の多くの場で単なるビジネス化・ラベル化によるうわべだけの運動になっている面が否めません。

SDGs の中で提唱されている事柄に本当に真剣に取り組んでいる人々は——どの宗教や倫理体系であれ——、「自分ではない圧倒的な存在のもとにある自分」を認識しているからこそ、それを真に意味ある行動にできていると思われれます。

聖書の宗教はこの点で、単なるビジネスや単なるラベルでない理念を本当に追い求める最有力な共同体の一つをつくりだす、そのような可能性を有していると言えます。SDGs の真髄を追いかける姿勢は、ランベス会議でも話し合われたことでありました。

3.2. 平和をつくりだそう…いのちを脅かすすべての暴力に「NO」！

世界中の戦争・紛争を見れば、この呼びかけの必然性は明らかであり、なかなか実現できない「平和」を訴えることは、力を合わせて唱え続けられるほかありません。また、様々な現場を知る者たちが発信して情報や手立てを分かち合い、いのちを脅かす暴力のすべてに対して否を突き続ける、それらをひたすら積み重ね、平和の実現に一步でも迫るための道が示されることを祈りましょう。

3.3. 世界のうめきや叫びに向き合おう…世界の聖公会(アングリカンコミュニオン)とつながりながら

宣教協議会では今年 40 周年を迎える大韓聖公会との関係性を示すブースも見られましたし、実際、これまでもたいへん密接な関係を築き上げてきました。また、フィリピン聖公会とのかかわりを見つめ直し、そのまじわりを深めるべきであるという提案も寄せられたご意見の中にもありました。1995 年および 2012 年の宣教協議会においても挙げられたこれらの主題が継承され、しっかりと理解される営みが求められます。それを通して近隣諸国との真の友人関係もまた、可能性が開かれることになりましょう。

また、アングリカンコミュニオンを見渡すと、英国、米国、カナダ、エルサレム／中東、オーストラリア、オセアニア、東南アジア等々、様々なつながりが日本聖公会には元々あります。そうした様々な聖公会の仲間たちと、様々な事柄を分かち合うことで、新たな発見の楽しみ、新たなまじわりの楽しみ、新たな体験が期待されます。

他方で、日本聖公会にも他の聖公会にも、様々なうめきや叫びとなる苦境も存在します。それらも分かち合えらるなりびとであるのは望ましいことです。月並みな言い方でいえば、「喜びは倍に、苦しみは半減に」の関係を、海を隔てても、聖なる公会のまじわりによって実現することを目指しましょう。

「2023 年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」は宣教協議会の後、比較的短時間で発出に至りました。その軸となったのは、宣教協議会参加者各位の声、2012 年宣教協議会の提言、また、宣教協議会実行委員長磯晴久主教の開会演説で語られた「神と人」「人と人」「人と被造物世界」。それは聖公会が大切にしている神学の一つである創造論にかかわるものでした。また、コミッティの各人のはたらきの場でも常に意識されてきたことでもあります。そのため——もちろん、もっと長い議論の時間があることが望ましかったのは言うまでもありませんが——、必要な主題が盛り込まれることは適ったと思われまます。

表現については抽象的な文言が並んでいるように受け止められるかもしれません。それは、日本聖公会には様々な教会、学校、施設があり「あまりに具体的にすれば、どこか特定の場においては有効であっても、他の場においてはあまり関連しない」ということがありうる、換言すれば、「呼びかけ」として広く用いることができないという可能性があったためであります。そこでこの「呼びかけ」は、わたしたち個々人の日々のはたらきや生活において必要な事柄を考える際のきっかけとして用いられてゆくことを目指すものとなりました。各人がこの呼びかけを自分事として捉え、主から先行して与えられている恵みやまじわりを通して、自分もとなりびとともに安心してみ恵みに感謝し、いのちを大切に歩む。「2023 年日本聖公会宣教協議会からの呼びかけ」が、そのための指針の一つになれば幸いです。